泮林

洋学文庫
文庫8
B 14

泮林

脇(ワキ)挟ト申者ハ、日頃学校ニ来リ学問修行ニ出精之者ニ候。
介ハ役名ニ而、釈奠之日ハ当日ニ而祭ニ居候所ノ
祭事を執行主ニ而候。我等ニ而其席ニ列居候而、右祭主
御祭祀之儀式を済、国老以下参会の族皆々、拝礼事
終り候而退散仕候而候。重而坐敷ニ遷し、会主堂。

大槻文庫

39-7917

祭器をも神庫に納めまゐらせよと替 シテサシ 抑此講堂と

則も他にも異なる規制にて ワキ 学校庠序兼備

シテ 設作新甚敬に 同 修造す唐の 明堂にも劣らす

まして造営なれは何しろ広大なる有さまかな

ワキ 思ひ立ぬる旅衣 遥けき路すから 同 是は

九州長崎の者にて候 我国々を遊歴し 名所勝跡

一見仕て此程ハ又東国を見て候程ニ此秋

思ひ立東の方へと志し候 東路の道すからと思ひ

来て ゆくかなる世のありさまを見しりて 名古屋も

戸さゝぬは国の光をみちのくの名に流れて

名とり川波を静まりて世は豊なる浦は城山の

府中の里に着にけり 急き候程にみちのくに着て候

とふやゝ着てみれば是ハ小ぎりの小里清き文是に
高くいらかをならべつゝ實に山中なしで泮林の。
立木をも志らぬ老近もんやハ哲人の〳〵かたしれず
東の都に使ひして ワキ 嬉しきやなたゞ今ハ久保成乃聖堂に
とて皆人腹を改め威儀を正し講堂にお入候。
〽我をも吟じ来る者と云ハ旅人なり何所
者でござ候。さてもやさしき者かなふたゝ吟じ来り
給ふハいかなる人ぞ ワレ 是ハ九州長崎より出たる
遊歴乃者にて候が今日講堂にて御講釈のよしと申ハ
誠の事にて候か ワキ さん候誠の事にて候 ワレ 嬉しくハ
卒尓なる事にて候へども我等を一見ゆるさせ給へ。
ワキ 先ハ思ひもよらぬ事を給ふものかな見申せハ旅人

まことの程ハ一見ハ叶ひ候まし

ワキ〽縦ひ一見ハ叶ひ候ハすとも遥々の唐衣心ほそくも立を出て遥々ここまて来りしかひの御同夜御参りしてひたすらの事ハさらにいかさまにも許し給ひて一見ゆるさせ給ひ候へかし

ワキ〽さてハ一蔵室に給ふ中々御身にハ叶ひ候まし

ワ〽あら情なの仰せかな一見ハ叶ふましのなきまゝにゆきゝ来の人の語りにもゆかしき講堂の衆生を化し給ふしさにせ須の長き旅路にも常をと忘れ給ふもおこぎ至れる未法や急ぐかひをなく戻しく返したまふな

ワキ〽かほと程まてせちに思ひ給ひて結縁急ぎ角をひらきの経蔵に拝ませ申さうするにて候

ワレ 嬉しや候ふ兎角待ち申しつる所にて候 ワキ いかに申上候

シテ 何事ぞ ワキ 只今門外に於いて旅人の沙汰候が何国

の者ぞと尋ねて候へば九州長崎より出でたる遊歴の者と

申して候 其者申し候は平生の事申して候へとて講堂の

禁中一見申し度との事にて候が見えては旅姿にて候

程に先は叶ひましと申して候へども去ながらせちに

頼み候といひ申し候へさ シテ 何と講堂を一見

申し度と申すか海路のはるばる中々平生にはあるまじき

事にて候へども又長崎は山海数千里を隔てて

当国に入らん事も心のうち たゞ来てたる今

さらばやかて深く深き八重の塩路浪枕の夜

袖のうきおもひは須臾を以て旅衣も来にて 同 縦渡

の事なれハ何しに〳〵御身をはなさぬ旅衣いかに

さるほとに此程の此様布も細布もうちまかせ給ひ

縦く返さんと余りに情なき事なれハ一見

許し候へ　ワキ　さらハ某よしなからも候ハん

あら旅人　荒涼申けり　ツレ　誠に候　ワキ　某申て候ハ

壱岐国よりハ遠く出しいかにしてはるはると一夜許し

申せとの事まて候去なから我らの式ハさやうに候

たとへ此あたりの事ハ候とも其跡ハ此所一人ハ許しまし

我らハ其出家まてハ叶ひ候ましく事ハ先法師なれ

社々旅の衣手もぬれぬ先を其まゝて一見

申さハ去ハ　ツレ　さらハ此方へ入らせ給へ候　物云

ねふと我講堂一見いたさんと旅の衣をぬきかへて

此袴被を着し此は講堂近く来り候

ワキ いざ講堂に続き此方へ渡り給へ ワレ 一覧申さうずる

扨々是はかざりたる宝物は見知らぬ宝物

までにてはいかさまそなたの御祭宝物まで見せ候へ

其宝物までに候。一々清書いて見せ候へ 畏て候 さらば是へ申さう ワキ さん候是こそ

ワレ 扨是にみえたるは何と申物にて候ぞ ワキ さん候是こそ

簠簋篚箪と申して黍稷魚醢を盛る宝物にて候

ワレ 又そこにあるはいかなる宝物にて候ぞ ワキ 是は爵と

申て神酒を献ずる宝物なり ワレ 扨又何とした

ワキ 象尊勺冪 ワレ 又こなたなるは ワキ 罍尊洗盤

ワレ こなたなるは ワキ 祝案香案にて 寶たくしなり

神祭我にも知らぬ民までもとりえを知る神徳を

作をお給ふ事迄しやく　我御尋の趣き荒増承り
爰に講堂制作の謂を委しく語り給へ　（ワキ）語て聞せ
申さうずるにて候。抑此講堂と申は堂の四方凡そ
二十五間棟は九間田字なり。先中央の一室は
大衆の為に其外の数は五十二間四面に高く構へたり。
是則十二辟卦のかたちなり。其余りし諸右左也。

四間宛落陽地の位と數を合て是を四十五間なり。
四十五間の後縁の眉を四つに分て國主襖の字の位と
定むる事は揚羽額に掛ては此堂号を記しける。先の
國主の御筆にて庶の左右の梅と松は元亨利貞の
四徳を表し、又左右の其障子は蜂蟻（ホウギ）と雎鳩（ショキウ）は鳥虫類。
是君臣の義夫婦の別、右の障子の扉と扉是亦

父子と兄弟の親序の道を示せり。又其鹿と
黄帝の謂れハ左右目ふして見て朋友の信の義人ハ
云なりや皮へき。黄帝と道の左に成表し給ふて古へ
の倉頡ハ鳥の跡を見て文字を作り。教の道を志し
へし。故文左右の枝葉ハ。羞恥魚躍を絵り知ぼ。
道の生機を知し悪をし天地の万物充ち満てり。

河図と洛書ハ自然の数。天地造化を網紀せり。然るに向へ
ハ文明の象を表して鳳凰の五色徳を行く梧桐
竹實棲と餌をあり。其次ハ十二室。十二室の要也数ハ。月次
日数を表し。四隅の四間の要也数を四季の土用を
象るなり。其次四方ハ遅き所間を四つ分くし。ハ東西南
四方也経。其室中より四経に分ちて。中央の其四隅ゆり

をそれの始めにハ。庭を設て環らせ次。四序此四面此
桂子は。六拾四卦を配せり。内より外ハ八卦を附す。
六十甲子に配分すへし。東西の両階ハ。主客を分んが
為なり。東階ハ是主君の階と定む。是みな三代の
学制第一にして。中より廻しに其外ハ。学校庠序此
序とうや。我不取の名る所とも知れこれ。参し事ハ

庠

ふの教へ是は学者へ志しなば倒りやとふ
安と志すへきて先生のに為志を謂は誰と謂ふものへ教ふるの
茶へおかれしハいて諭りて学ばせ申さん據此謙堂と
中ハ国主の給薬て學校序庠兼備へ改め是と
作るや先中央の一室を大學と是定むるも。
次の四室ハ校乃位。又其次四方に連序十六室是幾ハ

庠と定めしは四季に於て孟仲季を周代合せて
其次其次四面に迴るをハ 四方に於て序此
制あり 揖揖室の其数を 揖損僕林に於ては
蓍策の数に符合せり 文学の義を大学所とハ。
三代ともに皆同し 独り學ハ夏殷と周と義をとして
一八 授を教ふ 教へをまなふへし。庠序にて
食禮を宗に燕序の際ハ 射者ハ射礼を爲
亦も行ふへし。
と云ふも行ふに通し 様学問を小學ハ書を始とし
て 書六經を講じ序にて 大小各其室を二所せり
然りて誦吟を教へかし 學ハ元より陽なり。
其ハ胡毎に春の庠にて教授せる文被数の
二りそ元二の法に序ハ是を教ゆる其

庠と定めす、四季にして孟仲季を閏に合せて
十六と次、其次四面に廻席を、四にして席此
制あり　揖讓室の其数を　揖揖進退に附ハ。
蓍策の数に符合せり　曲礼大学の義を大学に遺ハ。
三代ともを皆同し　揖小學にて度数と周と義を示し
尋ね主として行ふ　授けて教なりや　教へを主とし

庠ハ養にて食禮と示し庠は義ハ射なりしハ射礼
とゆふも行ふ也し　揖学問も小学は書を始とし
ては書六経を謹ミ学まで　大小各其室を二而せり
然してハ通吟を教へかし　序ハ元より場なりしハ。
修する也　胡毎に春乃庠にて　教授せり文徳教の
二りしそ元二ま法に序もまた是と教ゆる其

室ハ路摩秋乃三川の宝足宮古法の意ぞ醐ぞ。
教へをうけいふしくしまいぞよみは天河のまつり
しでむにハ人筆侍らず　掬造営おさむ
石を集むる其数ハ。大小凡壱万九千　取又集る材木ハ。
壱万三千六百五十用数枚を二万八千三百投筆の
数ハ十六万。日々ハ百人夫工を集め積る日数ハ二千日

師走乃ころぞ落成の祭の式を早速ぬいらるも
同古度おもしろき御造営の人々や人によく謂ましと
世ハ有まうや。實に稀なる規割なると御常ハ高く讃
嘆ありき雲力をもつてあまねく広大の造営ぞ。
行末保川道いくを　光を保川乃為とてぞ学田
壱万二千石。草菜に地を開きけれバ光をもつて無

寄しかるを夫ハ理りなるかなかくらか禅宗の其
おし人々を猿をぬ御代をかし實なりまくと
賢しや学びし此人をもて至しらぬとはしまうつく
東の果までも道をもてさ絶さし謙堂
制作の趣意なれしは物語の法へ去程謙堂
制作の名にしおふ名君の御代にはまり日夜に

竹勝棒さまし伝へて八天乃数を窺ひ衛して八
地の法を察し諸書小本法を伺みをすへし古し
を韵なり哉謙堂て謙堂の制作を定めまおはしを
積し甲斐ありて今ここを落成の時いふり至れ
時ハ今ハ表法伝示法人の心の花を発かせと。
恵乃高や徳の風。なびく八君か御代と文てゐる

守る身の果まて世々を立へきかとおもしいとゝも
慈應の緒有りて二世の師匠ならて神なる
神は神食をゆるしゝと申すは同し神の神酒
とりおさて帰る心は積る思ひもとけてと解
てや春に帰るらん　首調や在原業平の恵まし
はかなきをもとの白糸の　心長閑なる色見えて。

春は糸に染めしまかふのけしきは面白や　ふるとりに
春を経すは見るまゝや　見渡せは降来る雪は
きならし花のちるかとうたかは　遅々ほ枝を
靡きて吹来る風にまたよる柳の糸のみとり見え。
實にや此年極め　人も千年見の浦そなた
志しめいかの宿折理ん　あら面白のおりからや

よしや色を重ね人の心の奥へ流るゝの

謙を今こそハ思ひ出しきそれかゝらや千年

振神よみハし天照岩戸の神楽人の世に至り

てハ大和舞や生物躍りハ行きて心を和らけさん。

されハ人和も楽しき世ハ四海波静かに時を

さまよふ長閑の春のけしき何もハなり。

五常ハ仁義をわし太平ハ民を撫て。

生の来しハ秋ハ君の齢を萬歳楽君がよハ

万年ハと納る生ぞ久しかれ

此洋林よ号うへし大樹清準先生
之著述我。男甜好傍ニ當流し章句
加招子者也

天保九戊戌年正月

天花庵大亮

恭經篤

OU
IV
104